平成30年（2018年）2月2日発行

長野県の埋蔵文化財情報誌

山鳥場遺跡出土土偶

信州の遺跡

第12号

最新調査成果から1

ベンガラが貯蔵された壺　佐久市　西一本柳遺跡ＸＸⅡ

西一本柳遺跡は、佐久市岩村田の湯川河岸段丘上に立地する。調査では弥生時代中期後半～中世にかけての溝跡10条(7条は弥生時代の環濠)、竪穴住居跡19棟（弥生時代後期1、古墳時代17、平安時代1)、掘立柱建物跡3棟、土坑22基、円形周溝墓3基、古墳1基などが発見された。

弥生時代後期の住居跡は、火災により焼けており、家の北東隅には当時の状態で壺や甕、高坏などの土器が残されていた。頸部に間隔をあけ、横位に櫛描の簾状文と条線文が描かれた見慣れない文様構成の壺型土器には、満杯にベンガラが入っていた。ベンガラは、土器の彩色などに使われる赤い顔料で、住居跡から大量に出土することは稀である。この家は、集落の中で特別な役割を担っていたのではないかと思われる。

（佐久市教育委員会　小林 眞寿）

壺に入っていたベンガラ（一部）

ベンガラ
酸化第二鉄を主成分とする赤色顔料のひとつ。

ベンガラが貯蔵された土器の出土状況

※写真提供：佐久市教育委員会

最新調査成果から 2

先人の発掘成果、再見　川上村　大深山（おおみやま）遺跡

調査までの経緯

大深山遺跡は、昭和 8 年に発見され、昭和 35 年から八幡一郎（やわたいちろう）先生の指導によって大深山地区の方々を中心に昭和 38 年まで発掘調査を行った。その後も地域の方々を中心に保存活動を展開し、昭和 41 年に、史跡として国の指定を受けた。以後、史跡公園として、保存と活用を図ってきたが、展示施設の老朽化への対応や大深山遺跡独特の浅い埋め戻しによる遺構への影響などを調査する必要性が出てきた。そこで、平成 28 年から、文化庁の指導を受けながら、文化財補助金を活用して、50 年ぶりの発掘調査を実施することとなった。調査に際しては、日本大学文理学部史学科の協力を得て実施した。

調査成果

平成 29 年度は、集落空白地点の中央部と 15 号住居跡を中心とする既出住居跡の状況確認を行った。中央部の調査では、土坑がわずかにみられる程度で未発掘の住居跡はないことが確認され、広場的な土地利用が明らかにされつつある。

既出住居跡の調査では、14 号・15 号・18 号・19 号・27 号住居跡を再発掘し、当時のままに残る炉跡や柱穴、周溝を確認した。これらの保存状態は良好であることが確認できた。

また、地形測量を並行して行っており、遺構分布の把握等を行い、今回の成果と合わせ、今後の保存と活用に生かせる成果を得ることができた。

（川上村教育委員会　長﨑 治）

（『信濃大深山遺跡』八幡 一郎 1976 より）

昭和 30 年代の発掘当時の姿で発見された炉跡

14 号・15 号・18 号・19 号・27 号住居跡

※写真提供：川上村教育委員会

最新調査成果から 3

堀を発見ー織田軍の本陣と伝わる城ー　伊那市　一夜の城

織田軍が一夜で築いたと伝承が残る城

伊那市富県にある「一夜の城」は、戦国時代、織田信忠軍が武田方の仁科五郎盛信が守る高遠城を攻めるために、一夜にして築いたとの伝承が残る、一辺約 50 mの土塁に囲まれた単郭方形の城跡である。平成 24 年、この城のことを調べるために発掘調査を行い、これまでは、陣城であるため、ないと考えられていた堀を、城の北（③）・西（②）・南側（①）で発見、また織田軍の武田攻めより 100 年以上古い陶器片が出土するなど、大きな成果を得ることができた。

今年度の調査の結果

そして今回、個人住宅の建設に伴い 2 か所でトレンチ調査を行い、城の虎口（出入口）がある東側でも、幅約 8.5 m、深さ 2.7 mを測る堀を、検出した（④）。さらに、平成 24 年の調査で堀の改修痕跡と考えた、最深部が深く窪んだ幅広い U 字形の形状の堀をそれぞれのトレンチで再び確認することができた（②）。この結果、堀は改修しながら一定期間使用していたものと考えられ、「一夜の城」は織田軍が一夜にして築いたものではなく、もともとそこに城館があった可能性がさらに高くなった。

また、堀の外側（東側）では「一夜の城」とは別の時代、平安時代の竪穴住居跡 3 軒を検出したほか、縄文土器片も多数出土した。（伊那市教育委員会　濱 慎一）

一夜の城全景（東から）

東側の堀（④：平成 29 年度調査）

東側の堀
（④：平成 29 年度調査）

※写真・図提供：伊那市教育委員会

明治時代の長谷窯の工房跡発見

長野市　長谷鶴前遺跡群

工房跡

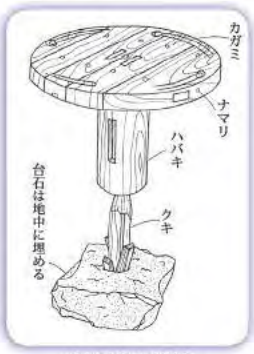
長谷鶴前遺跡群は、千曲川左岸の山から西に下る傾斜地と蓮田と呼ばれる低湿地にまたがって位置する。本遺跡は、長谷窯（慶応３年～明治 29 年ごろまで操業）推定地に近接する場所にあたり、工房跡と陶器製作の轆轤の台石が２点、当時の状態のままでみつかった。工房跡周辺からは窯関係の道具や陶器、焼き損じ品等が多数出土した。今から 150 年前に約 30 年間操業していた明治初期の地方窯業の実態を解明するための貴重な事例となった。

轆轤心石

工房跡から出土した轆轤の台石（轆轤心石）は、92.6kg、69.9kgとかなり重量がある。この重量も轆轤台を支えるための重さと考えられます。全国的にみても、設置された当時の状態で確認された例は、石川県加賀市の松山窯をあげる程度で、珍しい事例である。（近藤 尚義）

轆轤心石を伴う工房跡（矢印：轆轤心石）

轆轤心石の出土状況



手轆轤の構造

『瀬戸市誌 陶磁史篇五』より

灯明具の蓋（上：素焼き・下：鉄釉）

埋文ほっと情報

縄文時代のシーズニング ―朝日村山鳥場遺跡 種実圧痕分析結果から―

朝日村山鳥場遺跡から出土した縄文時代中期後半（約 4,500 年前）の土器に、粒状の圧痕が残るものがみられる。圧痕は混和剤として、土器製作時に粘土へ混ぜた砂粒が抜け落ちた跡だと思っていたが、有識者からエゴマの種実圧痕の可能性が高いと指摘された。そこで、圧痕のレプリカをシリコンで作成し分析したところ、圧痕の正体はエゴマの種実だと判明した。

エゴマの種実圧痕は在地系の唐草文土器 1 個体から 5 点検出され、さらにＸ線写真を撮影して観察した結果、同じ形状・大きさの圧痕がほかに 876 点みつかった。全てがエゴマの種実圧痕であれば、この土器は多くのエゴマを含む粘土で製作されたものと言える。また、エゴマ栽培は縄文時代中期前半には始まっていたとする説もあり、土器の製作場所付近でエゴマ栽培が行われていた可能性もある。

縄文時代のエゴマ利用は、「パン状炭化物」と呼ぶデンプン質の食品に含まれたものが知られ、エゴマは風味や味付けのシーズニング（調味料）であったと推測されている。

山鳥場遺跡近隣の道の駅ではエゴマが販売され、村内では今もエゴマ栽培の畑を見かける。エゴマは、縄文時代と現在に共通するシーズニングである。（贄田 明）

朝日村のエゴマ栽培
（平成 29 年 9 月筆者撮影）

エゴマ

エゴマを含む土器（部分）のＸ線写真
小さな黒い点がエゴマの跡（Φ 2 ～ 3 mm）
（撮影協力：長野県立歴史館）

同定されたエゴマの圧痕レプリカ写真

埋文キーワード　～土器の拓本～

土器の表面に描かれた文様や表面の調整を、墨で和紙（画仙紙）に写し取る作業を拓本と呼ぶ。

石碑の銘文を写し取ったものなど多くの人が目にしたことはあるものの、そのやり方を知っている人は少ない。写し取りたいものに直接墨を付けてしまった覚えのある人も多いのではないだろうか。

拓本は、まず写し取る土器の大きさに合わせて和紙を切り、水に浸した脱脂綿でやさしく押さえながら土器を包んでいく。この時、土器と和紙の間に空気が入らないように、中心部から周辺へ徐々に紙を押えていく事が重要である。和紙が浮いてしまうと文様がうまく写し取れないし、かといって強引にこすり付けると破けてしまう。土器に和紙をぴったりと貼り付けたらこのまましばらく乾燥させる。そして、カラカラに乾燥する一歩手前、墨がきれいに和紙に乗るちょうど良い頃合を逃さず、タンポと呼ばれる道具を使って墨を乗せていく。濃淡ができないように、細部まできれいに写るようタンポの大きさを選んで作業を進める。納得のいく濃さに仕上がったら和紙を土器からはがし、皺を伸ばして完成である。（西 香子）

タンポを使って和紙に墨を乗せていく

縄文土器の破片と拓本

珍しきもの　木製印（花菱紋）佐久市地家遺跡出土

佐久市地家遺跡の自然流路跡では、13～14世紀（鎌倉時代～室町時代）の陶磁器とともに木製品が多く出土した。その中に一辺を少し欠失している以外は、摘み部までほぼ完形の木製印がある。印面を観察すると、幅約1㎜程度の細い線で円と四方に延びる直線が刻まれ、分割された4つの部分それぞれに紡錘形の抉りが入れられていることが分かる。それらはシンメトリーな菱の4枚の花びらと雌しべや雄しべを意図したものとも考えられる。これをもしスタンプしたなら、家紋の「花菱紋」に似た4.6㎝×3.3㎝程度の印影が表れるだろう。印面を中心に黒ずんで見えるのは、黒の印肉を使用した痕跡とみられる。また、樹種は広葉樹と推測される。

中世の木製印の出土例は非常に少ない。押印対象としては布や漆器などが候補になろうが、その解明は大きな課題である。（水澤 教子）

地家遺跡出土木製印（幅4.9㎝、高さ4㎝）

埋文本棚

①

『十二支になった動物たちの考古学』
設楽博己 編著 新泉社 2015

②

『国宝土偶「仮面の女神」の復元 中ッ原遺跡』
守矢昌文著 新泉社 2017

平成30年は戌年である。①によると人にとってイヌは大切なパートナーであり食用の家畜であり貢納物の対象であるなど、時代ごとに様々な関係性を築いてきたという。全国の出土遺物や文献史料などをもとに、6名の研究者が日本における十二支の動物たちと人間の関わりを考察する。

平成29年は「国宝」という言葉が誕生して120年目だった。②は、茅野市中ッ原遺跡出土の土偶「仮面の女神」が国宝に指定されるまでの奮闘を調査担当者が記す。著者は、国宝指定に至る過程で製作方法や出土状況を検討し当時の墓制に迫り、「仮面の女神」を製作した中部高地の縄文社会の様相を論じた。（杉木 有紗）

お知らせ　掘るしん in 中野　柳沢遺跡発掘調査報告書刊行5周年記念展示会

平成30年3月3日（土）～3月4日（日）に、長野県埋蔵文化財センター出土品展「掘るしん in 中野」を開催します。銅戈・銅鐸などが出土し、注目を集めた柳沢遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書刊行から5周年を迎えるにあたり、弥生時代にテーマを絞って中野市で展示会・講演会・シンポジウムを開催します。

すべて入場無料・申し込み不要です。お気軽にご参加ください。

会場：中野市中央公民館・働く婦人の家（中野市三好町 1-4-27）

復元された柳沢遺跡出土銅戈

講演会

●平成30年3月3日（土）13：00～16：00

●報告　「中野市柳沢遺跡の調査成果」鶴田 典昭（長野県埋蔵文化財センター）

「銅戈・銅鐸の作り方―レプリカ製作過程―」廣田 和穂（　〃　）

●記念講演

「銅鐸研究の最前線－最新の成果から柳沢青銅器を考える－」

講 師：難波 洋三 氏（奈良文化財研究所客員研究員）

シンポジウム　「中野の弥生文化と地域間交流」

●平成30年3月4日（日）9：30～15：00

●発表　「中野地方の弥生文化」　柳生 俊樹氏（中野市教育委員会）

「弥生時代中期における北陸と信州との地域間交流」

久田 正弘氏（石川県埋蔵文化財センター）

「弥生時代中期における関東と信州との地域間交流」

松田 哲氏　（熊谷市教育委員会）

●パネルディスカッション

「中野の弥生文化と地域間交流―柳沢青銅器発見から10年、その後の研究動向―」（仮題）

パネリスト：柳生 俊樹氏　久田 正弘氏　松田 哲氏　ほか

考古学の窓　「見直し論」は研究の原動力

平成５年に鹿児島県栫ノ原遺跡や青森県三内丸山遺跡の全貌が明らかになるにつれて、「縄文文化を見直す」というメッセージが発せられた。

三内丸山遺跡（写真提供：青森県教育庁）

前者については、今までは遺跡数も少なく、縄文文化の「後進的地域」と思われていた南九州で、火山灰の下の縄文時代草創期や早期の遺跡の調査が進むと、関東地方や中部高地では、縄文時代中期以降に見られるような大型の石斧や土製耳飾、シルエットだけみれば弥生時代のモノかと思われる壺形土器など、従来の縄文文化研究の常識とはかけ離れていることがわかってきた。

前者の「発見」に連続して、縄文時代前期から中期にかけて三内丸山遺跡が、遺構や遺物量とも今までの常識を凌駕する大集落跡であることが判明した。三内丸山遺跡のシンポジウムでは、縄文文化を日本列島固有の文化として、日本だけで論じるのではなく、東アジア的な視野でとらえることが必要とされた。

さて、その「見直し」という言葉であるが、辞書的には「もう一度改めてみて、気づいた欠点を直す」という意味がある。今までの研究に足りない点があり、それを補うべきだとの意味なのか。

「縄文文化見直し論」で提唱された、従来辺境的な地域と思われていた南九州地方の成果は常識となってきたし、縄文文化を東アジアの中でとらえて研究することも、当然となりつつあり、「縄文文化見直し論」は一定の成果があった。見直しの言葉には､「それまでの認識を改める」や「回復してよい方に向かう」意味もある。

そうしてみると、見直し論が必要なのは、「縄文文化」だけではない、本号の埋文ホット情報でも取り扱った朝日村山鳥場遺跡の種子圧痕は「縄文農耕論」の、前号で紹介した正倉院級の金属製品ともささやかれる長野市小島・柳原遺跡群の塔鋺形合子は「信濃古代史」の「見直し論」につながるのである。見直し論は終わることがない考古学の原動力そのものである。（川崎 保）

編集後記

今号は縄文時代から近世・近代にわたる最新の発掘調査成果を掲載した。西一本柳遺跡群ではベンガラが満杯に入った弥生土器、長谷鶴前遺跡群では地元窯（長谷窯）の工房跡が発見され、地域史を解明する貴重な資料が得られた。この２遺跡は開発に伴う記録保存の調査である。今年は史跡整備や遺跡の実態を把握するための発掘調査が県内各地で行われた。50 年振りに姿を現した大深山遺跡の遺構群や、地元に残る伝承に再検討を迫る資料が得られた一夜の城の調査は、その一例である。遺跡が残されていたからこそ、従来の調査や見解を追検証し、遺跡の実態解明に向けてより一歩を踏み出せたものと思われる。

国民共有の財産である「埋蔵文化財」を、後世に残すことからすべては始まると、今年の発掘調査を概観していまさらながら想った次第である。（河西克造、贄田 明）

本号で掲載した遺跡位置

（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007　長野市篠ノ井布施高田 963-4
TEL 026-293-5926　FAX 026-293-8157
http://naganomaibun.or.jp/　印刷：奥山印刷工業株式会社
この冊子は、平成 29 年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業で作成しました。